

司式 熊田雄二牧師

奏楽 五十嵐美代枝姉妹

前 奏

開 会 招 詞

* 賛 美 歌 6:1 我らの御神は

我らの御神はあめつちすべます 国々島々喜び讃えよ アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書3 罪の告白②

主なる神よ、あなたの御前に背きの罪を告白します。わたしは聖なる戒めに従わず、失われた羊のように迷い出て、思いと言葉と行いにおいて罪を犯しました。しなければならないことをせず、してはならないことをして、自分の身に、あなたの怒りと裁きを招きました。憐れみに富んでおられる父よ、罪と過ちを悲しむわたしに憐れみを注いでください。神の独り子である救い主の名によって、わたしを赦してください。聖霊の恵みによって、わたしを新しく生まれ変わらせてください。願わくは今から後、み栄えのために生きる者とならせてください。主イエス・キリストの御名によって。

アーメン。(詩編32、イザヤ53、ローマ7)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 71 それ神はその独り子を

それ神は その独り子をたもうほどに 世を愛したまえり

すべて彼を信ずる者の 滅びずしてとこしえの命を得んためなり

それ神は世を愛したまえり 世を愛したまえり アーメン

共同の祈禱 祈禱書29 聖餐式主日④ 待望

聖なる神さま、栄光と誉れは全てあなたのものです。

あなたは、御ひとり子を世に遣わし、あなたの満ち満ちた豊かさを宿らせ、わたしたちの道・真理・命としてくださいました。主は、死によってわたしたちの死を打ち破り、復活によって、わたしたちの命を勝ち取ってくださいました。

それゆえ、わたしたちは、主イエスの命令に従い、聖餐式で主の死を覚え、主の復活をたたえ、栄光の内に主が再び来られる日を待ち望みます。(コロサイ1～2、ヨハネ14)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 沖縄伝道 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

聖書朗読 ルカによる福音書10章1～16節 (新約聖書125頁)

説教・祈禱 「狼の群れに子羊を」 熊田雄二牧師

* 賛美歌 50:1 飼い主わが主よ

かいぬしわが主よ まようわれらを

わかくさの野べに みちびきたまえ

われらをまもりて やしないたまえ

われらは主のもの 主にあがなわる アーメン

* 主の祈り 祈禱書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 67 主イエスの恵みよ

主イエスの恵みよ 父の愛よ 御霊の力よ

ああ みさかえよ アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇献一長老 (司会・受付 次週：古澤純一長老)

本日 受付 1階：森永美保執事 2階：若月学執事 / 動画：森永翔馬兄弟 録音：門脇光生兄弟
次週 受付 1階：佐藤紀子執事 2階：大日南信也執事 / 動画：大日南悠兄弟 録音：森川莞太兄弟

I 他に72人の派遣

イエスは12弟子の他に72人を任命して、「神の国は近づいた」と福音宣教に遣わされました。12人では足りないのかというと、足りませんでした。2節「収穫は多いが働き手が少ない。」よく、伝道者にならないかと呼びかける時に使われる聖句です。現に神学校や研修所で学ぶ学生は絶えず少ない状態です。

派遣に際しての心得は、12人を派遣した時とほぼ同じです。

一つは4節「財布も袋も履物も持って行くな。」12弟子の時は「杖も袋もパンも金も持って行ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。」(9章)ちょっとリストは違いますが、だいたい同じです。

もう一つは、じゃあどうやって生活するのかということで、受け入れてくれる家があったらそこを拠点として、7節「その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな」と、これも12弟子の派遣と同じです。

伝道者は伝道の働きで生活せよということですが、この72人は十二使徒と同じように、今の伝道者にはない、すごい権能が与えられていました。9節「その町の病人をいやし、また、「神の国はあなたがたに近づいた」と言いなさい」と、宣教に伴う愛の行ない、いや、宣教に先立つ愛の行いが命じられました。

病気を治してくれたら、どんなに嬉しいことでしょうか。人々は、病いは悪霊にとりつかれているからとっていましたから、悪霊を追い出して病気をいやしてもらった人たちは、医者にかかったらどれくらいお金がかかるかと思うと、喜んで食事と宿泊くらいは世話してくれたでしょう。

最後の心得も十二使徒の派遣と同じで、10-11節「しかし、町に入っても、迎え入れられなければ、広場に出てこう言いなさい。『足についたこの町の埃さえも払い落して、あなたがたに返す。しかし、神の国が近づいたことを知れ』」。

II 受け入れない町

このように、神の国は、受け入れる町にも受け入れない町にも近づいて来るものです。受け入れる町には「平和」が、受け入れない町には「罰」が、神の国と共に迫って来ます。その受け入れない町のリストが次の段落です。

次の段落には小見出しが「悔い改めない町を叱る」で、その下に(マタイ11：20-24)とあります。その前の10章始めの段落の小見出しは「七十二人を派遣する」で、その下には何もありません。つまり、「七十二人を派遣する」はルカ福音書だけにある記事です。そしてそれに続けてルカは悔い改めない町のリストを挙げています。

ルカとマタイの共通テキストはマルコ福音書ですから、きょうの所はマルコ福音書にはない話です。「七十二人を派遣する」と「悔い改めない町を叱る」を合わせているルカ福音書は、やはりいちばん詳しいと言えます。さらにそのあと、72人が派遣されてどうだったかを報告する話も加えて詳しいと言えます。これは次回、扱います。

十二使徒はイスラエル十二部族に派遣されましたが、72人もイスラエル十二部族に派遣されました。12の6倍ですから、相当強化されました。それでも悔い改めないなら、12節「言うておくが、かの日には、その町よりまだソドムの方が軽い罰で済む」と主は言われました。ソドムは、アブラハムから分かれた甥のロトが住んだ俗悪な町で、神に滅ぼされました。それでも、神を知っているイスラエルより、神を知らない、悪い意味で名高いソドムやゴモラの方が、軽い罰で済むと言われたのです。

そのイスラエルの町として、コラジン、ベトサイダ、カファルナウムが挙げられています。イエス様がお育ちになったナザレ村のあるガリラヤ湖周辺の町々で、いずれもガリラヤ湖の北にある町です。すると、ガリラヤ湖の南や東西の場所は大丈夫だ、サマリアやユダヤはまったく大丈夫だ、となるのでしょうか。そうではありません。ユダヤのエルサレムは、イエス様を十字架に付けた町です。

13～14節「コラジン、お前は不幸だ。ベトサイダ、お前は不幸だ。お前たちの所でなされた奇跡がティルスやシドンで行なわれていれば、これらの町はとうの昔に・・・悔い改めたに違いない。しかし、裁きの時には、お前たちよりまだティルスやシドンの方が軽い罰で済む。」ティルス、シドンは現在ではレバノン、古代パレスチナではフェニキアという小さな経済大国の港町です。横浜、神戸に当たります。

イエス様の奇跡を見たイスラエルの町より、奇跡を見なかった異邦人の町の方が、軽い罰で済むと言われたのです。これはさっきのソドムの方が軽い罰で済むと言われたのと同じです。イエス様の奇跡を見たのは、ガリラヤの人たちだけではありませんでした。サマリアやユダヤの人達も見ました。悔い改めを必要としない町などないのです。

Ⅲ 狼の群れに子羊を

72人を派遣するにあたって、主イエスは言われました。3節「行きなさい。私はあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに子羊を送り込むようなものだ。」 「狼の群れに子羊！」想像しただけでも恐ろしい光景です。

実際、イエス様は、十字架にかかりにエルサレムに向かっておられます。そのイエス様とエルサレムに向かうこと自体、「狼の群れに子羊を」という状態でした。今その途中の旅路にあるわけですが、十二弟子を派遣し、72人の弟子たちを派遣して、神の国の宣教をし続けられました。また多くの人を癒す、宣教に伴う愛のわざを、弟子たちを用いてでもし続けられました。

悔い改めの福音は、旧約時代も預言者たちを用いてなされ続けられました。しかし、多くの預言者が、権力を持つ狼たちによって殺され続けました。神に逆らう王たちや偽預言者たちがたくさんいたのです。しかし、真の王であり預言者であるメシアを、子羊たちは待ち続けました。そして、時満ちてメシアが現れ、真の祭司ともなされました。真の祭司は自身が真のいけにえでもありました。メシアがエルサレムに向かって行くのは「世の罪を取り除く神の子羊」になるためです。

ルカ文書第二巻『使徒言行録』は、狼の群れに子羊が派遣された記録でもあります。それは今日まで続いている福音宣教であり、殉教者も多く出ました。日本ではキリシタン時代が、目に見えて「狼の群れに子羊」でありました。今は、目に見えにくい「狼の群れに子羊」状態です。狼は必ずしも権力者だけに限りません。世の富や快樂も、羊や子羊に

とって狼になり得ます。しかし、キリストは羊の大牧者として、今も昔も共におられるのです。

私たちが福音宣教に励む時、16節の御言葉が昔も今も実現しています。「あなたがたに耳を傾ける者は、私に耳を傾け、あなたがたを拒む者は、私を拒むのである。私を拒む者は、私を遣わされた方を拒むのである。」

これはつい最近学んだ三段論法ですね。9：46-48で、イエス様は子供をそばに立たせて、弟子たちに教えられました。「私の名のためにこの子供を受け入れる者は、私を受け入れるのである。私を受け入れる者は、私をお遣わしになった方を受け入れるのである。」これもキーワードは「私」であります。キリストの言葉に耳を傾け、キリストを受け入れる羊や子羊は、今もいるのです。